説法における因果

――『百座因縁』試論――

安東大隆

1

仏教の思想を問題にする場合、『因果』ということを抜きにしては、語れないのは当然である。人々に対して、多く説かれていたものもこの「因果」の思想である。

周知の『日本霊異記』に、

◇愚痴の類は迷執を懐き、罪福を信ぜず。深智の儔は内外を観て因果を信け怒る。

◇善悪の状を呈すにあらずは何を以ちてか曲執を直して是非を定めむ。因果の報を示さずは何によりてか悪心を改めて善意を修めむ。

◇祈はくは奇記を覧る者、邪を却け、正に入り、諸悪作すこと莫く、諸善奉行せむことを。

とあるように、因果（特に善因善果、悪因悪果）を説いて、この世における善行を勧めるという形式になっている。その原因と結果は、時を隔てて結ぶこともあるし、又時を隔てずに結ぶこともあった。

現世で善行を積んで来世で極楽に往生しようという、浄土教の代表的な考え方も、この因果の思想によるものである。又善をほどこしておけば、必ずその結果があるはずだ。善なる報いをうける筈であるという考えも当然に生まれてくる。異類による報恩譚もその範疇にはいる。大きく言うと親と子供の養育被養育の関係も又、

木を植うる志は、その果を得、並びにその影に隠れむが為、子を養ふ志は、子の力を得て併せて子に養はれんが為なり。

『霊異記』（中三）

と考えると、養育するということが因で、養育されるということはその結果と考えることも、不可能ではあるまい。

又、現世における不遇を、前世の因のなさしめるところと了解する場合もある。逆に現世における恵まれた境遇を、前世の善因のしからしめるところとする考えもある。（十善の位などという言い方はその典型である。）

以上のような見て行くと、「因果」という考え程日本人の

中に深く広く定着したものはあるまい。

ここでは、説法の中で、「因果」がどのように語られているかを見ていこうと思う。

2

澄憲が南都からの帰途、山賊に襲撃されて「十二因縁の心をめでたくとき聞かせて」教化した説話が、『古今著聞集』にある。道心もないと思われる荒々しい山賊を教化する時に、因果の話をする。尤も効果的であったのであろう。自分の今している人の物を盗むという行為が、巡って廻ってどのような結果をもたらすかという事を、説き聞かせられれば、誰しも出家を願うであろう。山賊達が「もとどり」を切って送ってきたのも至極当然の結果ということになろう。

『今昔物語集』巻十四に、「知前世語」と題した説話がいくつかある。

醍醐僧恵増、持法花知前生語第十二
入道覚念、持法花知前生語第十三
僧行範、持法花経知前世報語第十四
越中国僧海蓮、持法花知前世報第語十五
元興寺蓮尊、持法花経知前世報語第十六
金峰山僧転乗、持法花知前世報語第十七
僧明蓮、持法花知前世報語第十八
備前国盲人、知前世持報花語第十九
僧安勝、持法花知前世報語第二十
比睿山横川永慶聖人、誦法花知前世語第廿一
比睿山西塔僧春命、読誦法花知前生語第廿二
近江国僧頼真、誦法花知前生語第廿三
比睿山東塔僧朝禅、誦法花知前世語第廿四
山城国神奈比寺聖人、誦法花知前世報語廿五

以上の十四話である。これらはいずれも『法華験記』に基づいている説話である。『法花経』の霊験を語る説話であるが、その中に二世にまたがる因果がとかれている。十二語を引いてその内容を概観しよう。

醍醐寺の僧恵増は日夜に『法花経』を読誦していたのであるが、方便品の比丘偈の二文字を忘れて読誦することが出来ない。長谷寺の観音に七日籠って祈請すると、夢に老僧が現れて、次のように告げる。

前生ニハ、幡磨ノ国、賀古ノ郡ノ□ノ郷ノ人也。汝ガ父母、未ダ彼ノ所ニ有リ。汝ヂ、前生ニハ、其ノ所ニシテ僧ト有リシニ、火ニ向テ法花経第一巻ヲ読誦セシニ、其ノ火走リテ経ノ二字ニ当リテ、其ノ二字焼ニキ。汝ヂ、其ノ焼タル二字ヲ不書綴ズシテ死ニキ。其ノ故ニ、今生ニ、経ヲ誦スト云ヘドモ、其ノ二字忘レテ不思ザル也。

その経はその場所にあるので、すぐにその国に行き二字を書き綴って、「宿業ヲ可懺悔シ」ということであった。早速その場所に出掛けて行って夢告の通りにすると、読誦することが出来た。

この世に於て、不可解な事実に遭遇すると、（勿論この世

の有様からではその不可解な理由を説明することが不可能である）その合理的な説明を、此の世界の他に求めようとする。この説話の場合、『法花経』の二字をどうしても読むことが出来ないという、不可解な事実に出会った。その理由をより合理的に説明する為に、時を超えて結ぶ因果の法則が用いられている。この説話を説かれた人々は、その合理的な説明に、充分納得したものであろう。この説話を成立させる背景には、当然、人々の中に浸透している「因果」という考え方がある。『今昔物語集』の他の説話も同種の内容である。

此れ等の具体的な例を見ても、因果の考え方が、深く人々の心の中に浸透していたことが理解出来る。

3

さて、問題にしようとしている『法譚　百座因縁』（上・中・下　三冊）は、「豊後州」の「釈厳浄僧英」の述したものである。僧英には『百座因縁』の他に『十楽歓喜弁』『勧化無常弁』『蓮如上人百年眼』の著書が知られている。

『百座因縁』の下巻にある次の記述に注目したい。

犬子

善悪因果広報ノ道理ハ鳥類畜類マデ逃レカタク人ヲ悪メバ。人カラ悪マル。不便ヲ加ェテ人ヲ哀レメバ。又人カラ不便ヲクワヘラル、

○古ヘアル山寺ノ僧房ニ一疋ノ犬有テ。五ツノ子ヲ持シガ。此三疋ノ犬ノ子。母犬ノココロカラハ。皆々不便ニアリソフナモノヲ。四疋ノ犬ノ子ヲ可愛ガッテ。残ル一疋ノ犬ノニハナンホテモ乳ヲノマセズ朝晩悪ンデイガミ吠ルユヘ。寺内ノ坊主下部ニイタルマデ。此母犬ヲ打擲シテ殊ノ外ニ悪ミケルガ。有夜寺内ニ一同ニ不思議ナ夢ヲ見ケルハ。件ノ母犬前膝ヲオリ涙ヲナガシ人ノ物云声ヲナシテ。我身ハ前ノ生何某ト申遊女ナリシガ身ヲケガシテ命ヲツナグツラキ勤ノ事ナレバ独リヨリハ二人ノ客カ我身ノ勝手ニヨロシトユヘ。馴ミノ客ヲ五人モチシニ其内四人ノ男ハ情ケ深ク ココロザシノ程モ互ニ浅カラザリシ所ニ。一人ノ男ハマコトノ心スクナキユヘ。日頃悪フオモヒナガラ胸ヲサスッテ。コラエシニ。今此寺ニイル五疋ノ犬ノ子ハ我前生ノ五人ノ男。四人ノ男ハ昔ノ情フカキユヘ。今畜生トナッテ乳ヲ呑ニモ。イトオシク不便ニ思ヒマス。恥シヤ一人ハ。昔モ悪フ思ヒシユヘ。今乳ヲ呑スニモ心ニソマズ。常ニソバヘモヨセツケズ。舌ヲダシテ甜ッテモヤラズ。イカニ阿奈他方ナゼアノ犬ニハ乳ヲ呑サヌカトテ打擲シテニクミ玉ヘドモ。前ノ生ヨリカヽル訳アル事ユヘニ。畜生ナガラ我心ドウ料簡イタシテモ。可愛ココロガオコリマセヌユヘ。ドウモ力及バズコヽノ所ヲ聞ワケ玉フテ。御許シナサレテ下サリマセヨ。去ナガラ悪カリシ男ノ甥ガ明日犬ノ子ヲ貰ヒニ参ルベシ。善悪因果ノ報ヒノ所ヲ必ズ御不審ニ思シメスナドシテ涙ヲナガシテ吠ルト思ヒシガ忽チ夢サメケリ。夜ガ明テ寺内ノ人々我レモ吾モ其夢ヲ見タト。少シモ違ハズ夢バナシヲシテ大キニ驚キ入テ居タ所ニ。ソノ日ノ昼時分ノ頃。

一人ノ男来テコナタニ居マスル犬ノ子ヲワレニ一疋クタサレトテ。殊ノ外所望スルユヘ何レニテモ望ミ次第択トリニセラレヨトイフニ。疲テハ居マスレドモ此犬ノ子ガホシフ御坐ルトテ摩ツサスリツ不便ヲクワエ。母犬ノ乳ヲノマセズ悪メシ子ヲ貰ヒウケテ帰ッタユヘ。夕部ノ夢ノ告違ハヌコトヲ思ヒメズラシテ。皆一度ビックリシタトアル。　因縁故事ニ出

この文章では最初に、「善悪因果応報ノ道理ハ……」と因果の定義を述べる。その後で例話が示される。更に次のような結びの文章に続く。

ナント御人数前生ノ因果トハイヒナガラ。畜生ナレドモ可愛ナキ子ト可愛子ガアル。

人間トテモ同事トリワケ親ノ思フ子モアレバ又左程ニナヒ子モアル筈。家ニツナヒダ牛馬ガ前生ノ親兄弟ヤラ。呵リマハス犬雉リカ過去世ノ伯父伯母ヤラ。生ヲ隔シハ其訳ヲシラズ善モ悪モ因縁ナラズト云事ナク。宗々アマタアル中ニ。別シテ御門徒ニ御流レヲクミ其内ニ又浄土往生ノ御教耳ニ入タハ。生々世々ノ御目ガケノ顕ハレ。化ヤオロカニ御因縁デハナイト信スベシ喜ブベシ。

この結びの中では、「ナント御人数前生ノ因果トハイヒナガラ」以下「因縁ナラズト云事ナク」迄が、いわば一般的な部分である。その後「宗々アマタアル中ニ」以下は、真宗に関わる結論を述べた部分である。

もう少し具体的に説話の内容を吟味していくと、山寺の僧房に五疋の子犬を持つ母犬がいた。母犬はその子犬の中で四疋は可愛がったが、一疋は邪見に扱っていた。その様子を見た寺に住む人々は、母犬を打擲する。或る夜に寺に住む一同が不思議な夢を見る。それは犬が前世を語るものである。犬は前世に遊女であり、五人の男と馴染にしていた。その中の四人とは情が深かったのであるが、残りの一人はそうでもなかった。今、世がかわって犬の身を受けたのであるが、前世の関係をそのまま持ち越して、四疋には乳を与えるが、一疋はそうはいかない。そういう理由があるので、どのように非難されようともどうもならない。自分の心で料簡してもどうにもならない。可愛いと思う心が起こってこない。

そのような事情を考慮して許してください。が、明日その男の甥が犬の子を貰いに来るだろう。と言って犬が吠えたと思うと目が醒めた。翌日の昼頃一人の男が犬を貰いにくる。その男は、五疋の犬の中でその冷遇されていた一疋を選んで連れて帰る。

この説話の中では、現実に区別され冷遇されている一疋の子犬。その冷遇されねばならない理由は、過去世に溯ることによって説明される。夢の取り扱かい方も現在とは比較にならない重いものであるが、一同が同じ夢を同時に見るという不思議さ。その不思議さがかえって信憑性を高める働きをしている。更に、夢の醒めた後の現実の世界の中で、夢で予言されたこと（甥が貰いにくる）がおこる。貰いに来た甥は五疋の中からその一疋を選んで連て行く。夢と現実を関連させ、

夢も又真実であるということを説明しようとしている。そうすれば、現実の奇妙さも合理的に説明し理解させることが出来る。従って、「因果の法則」というものは、厳然として存在するのであるという結論になる。整然とした展開ということが出来よう。

その犬の親子に説話を配した後に、前述した二段階の結びが付加されている。その結びを詳細に検討してみると、次のようになる。一般的な部分で、犬の話をうけて「畜生ナレドモ……」と述べ、更にそれを広げて「人間トテモ同事……又左程ニナヒ子モアル筈」と人の世界までもってくる。そこまでのことは、当然予測できる進展であろう。が、次の「家ニツナヒダ牛馬が前生ノ親兄弟ヤラ。呵リマハス犬雉リカ過去世ノ伯父伯母ヤラ」という描写になると、論理的にいささか強引のような感じがする。今、身の周りにいる牛馬、犬鶏が前世での肉親であったかも知れない。というのであるが、犬の親子の前生譚からはじめて、牛馬犬鶏が前世の親兄弟伯父伯母というのでは飛躍があろう。つまり全てが因縁のしからしめるところである、という次の文へ続かせていく為の布石である。最後には浄土往生の教えが耳にいるには、深い因縁によるのである。「信ズベシ喜ブベシ」と呼び掛けて、浄土信仰へ唱導する。犬の親が五疋の子供の中の一疋を冷遇した説話が、最後には浄土往生を勧めるための説話になっている。

『百座因縁』の中からもう一つ例をあげてみよう。巻の一にある「横屈」の話である。前書きは次のようにある。

六根具足ノ人間ト生レテ眼ニ如来ノ御尊形ヲ拝ミ耳ニ無上ノ要法ヲ聞口ニ報謝ノ念仏ヲ称エ。手ニ珠数掛テ足ヲ運ビ。礼拝恭敬ニ不自由ナ事ナキ。未来成仏イタスハ不足ノナヒ境界ナレバ聞テ喜ヒ見テ敬ヒ。タフトヤ〳〵ノ称名相続ハ行者一代ノ報恩ノヨロコビナルベシ

横屈は、百姓の子であり、貧しい暮らしをしていた。その横屈が一見何の脈絡もない五つの事件に遭遇する。その事件とは次のようである。

1、隣の家から牛を借りて畑で仕事をした後、返しにいき、隣家の主人がいたので馬屋迄引き入れずに帰った所が、その牛が逃げてしまったこと。
2、役所へ行く途中の川で大工に出会い、渡川の為に浅い所を聞いたところ、その大工は手斧を口にくわえて渡っていたので、返事をするとその斧を取落してしまう。
3、垣根を跳び越えたところ、丁度その下で畑仕事をしていた百姓親子の父親のうえに落ちてしまい踏み殺してしまったこと。
4、茶屋に休む時に布団の上に腰掛けたところ、その下に赤子が寝かせてあったのに、気付かず圧死してしまったこと。
5、馬を取り逃がした馬主の、捉えてくれという叫びに応じて、馬の前足を打ったところが骨折してしまった。

2から5迄の事件は、1の事件を起こしたので、「公儀沙

汰ニイタサン」ということで役所に行く途中の出来事である。役人は各々の訴えを聞き、横屈を無罪にしてしまう。例えば、1の場合は、

牛ヲ借シタルモノ隣ノ横屈ハ阿房ト云コトヲシリナガラ、直ニ牛ヲ馬屋ニ引入レンハ其方ガ無調法ナレバ、日テ見ナガラ馬屋ヘ入ンハ目ガアッテモ入ラヌモノ。目ヲツブシテシマエ。ソレガイヤナラ料簡シテ帰レト仰セ付ラレタ。

のような理由による。それの裁定はかなり強引な印象を受けるものであり、こじつけをして横屈を無罪に導いているような感じさえするものである。

扨て、横屈は無罪の裁きをうけた後に役所から退出するのであるが、その門前で次のようなことに出会う。

榎木ニ鳩ガ十羽トマッテ其方ガ容ナ親ニ孝ナ者ハ、此木ノ下ヲ掘テ見ヤ、金ガアルソト鳴テ告ル。件ノ鳴声外ノ者ノ耳ニイラズ。唯横屈一人聞タユヘ、其榎木ノ根ヲ掘タレバ、数多ノ金ヲ掘出シ一生富貴ニ暮シタトアル。

最後になってはじめて、横屈が親孝行をしている者であることが説明されている。その理解のもとに前の物語をみると、一見強引ともとれるような裁定がくだされて、横屈が無罪になったのも、彼が親孝行の故と納得する。更にその次に、横屈等のここに登場する人々は、現在の誰であると、説明し、この説話が前世譚の形であることが理解される。因に、横屈は舎利弗、牛をかした百姓は頻婆娑羅王、大工は阿闍世、親を殺された百姓は提婆達多、茶屋の女は韋提希夫人、馬士は耆婆大臣、鳩は如来の十大弟子、事件を取り裁いた役人は釈迦。以上の役割であった。

次に結びとして、念仏へ結縁するように勧誘する一文がつづいている。

一切世間因縁ナラヌコト一ツモナクナント同行中能々ノ因縁ガ深ケレバコソ。胎内ヨリ御門徒ニ流レヌクミ、膝ノ上カラ善知識ノ御教化ヲ聴聞イタシ教エガ御懇ナレバ領解ノシニクヒコトモナク、法ガ易行易修ナレバ相続ニムツカシイコトモナク、殊更御繁昌ノ最中、寺ヘ参ラレン足ナラバ打切テ除ヨ珠数ノカケラレン手ナラハ、切落テシマヘ。如来ヲ拝レン眼ナラバ突ツブシテシマエ。法ノ聞レン耳ナラバ木耳同前、念仏ノ称ラレン口ナラバ縫フサヒテシマヘト、キビシク御催促ハナサレネドモ、此度門徒ト生レ出タハ万却生ノ初事ヂャト存シテ、耳傾ケテ南無アミタ仏ノ御イハレヲ聴聞イタシ、ココロニ受会ヒクチニ称エ信心歓喜ノ思ヒガアラバ、足手ニ叶タ寺参リ、同シ五尺ノ骸ナレドモ、ワルサルワザニ手足ヲツカヘバ、忽チ地獄ノ骨折トナリ、参リ下向ノ足手ノ苦労礼拝恭敬ノ骨折ハスグニ如来聖人エノ御報謝我等ノ浄土参リノ遊ビコソ。浅キ物カラマコトナリケリ。慈鎮和尚ト足手ヲ引ヒテノ参リ下向ハ浄土参リノ遊ヒジャト喜ヒ玉フタ。兎角信心決定身分ハ喜ヒト共ニ参リ下向イタシ喜ト共ニ南無阿弥陀仏

この結びの文章で、普通に考えてみると、本文との関連は薄い。しいてその関連を言えば、六根にかかわる部分である。

六根を具足しているのであるから、仏の教えを聴聞する為に使うようにする必要がある。そうでなければ、全く意味をなさない。六根を具足してしかも聞くことの出来る立場（御門徒に流れをくみ）に生まれている。これを因縁と言わずに何を因縁と言おうかという展開である。が、概して因縁というものは不思議なものであり、説明の出来にくいものである。現世では不条理と思われ、その合理的な説明がつきかねる話、それは前世の原因でそうなっているのであるという考え方を、取り入れることによって説明される。前世と現世との関わりを説明することは又、現世と来世との関連を確実なものにすることでもあった。

現世の不条理を前世の因縁のしからしむるところであると、理解し行動した例としては、妙好人がある。

石州の九兵衛は、享保の頃の人であるが、ある年の夏の旱の節に、山へ草を刈りに行く途中見ると、自分の田にはいる溝の口が塞がれて水が全く入らず、すべて他人の田にはいるようになっている。それを見た九兵衛は、そのまま家へ帰って仏前に灯明をささげて妻子を呼び、「御礼を申せ」と言う。そのわけは、

これは我前世に、人の田へかくる水をせきとめたる報ひなるべし。昔のときにしもあらば、腹の立にまかせて、又人の水口をふさぐべきに、前世の業なりと気を付させて下さるは、ひとへに大善知識の厚御教化の顕れなり。この御礼を申さではあるべらずとおもへば、かくはするなり、

と、九兵衛の言葉で説明されている。干魃の時に田に水がはいるか否かは、文字通り死活に関わることである。にも拘らずこのような行動をとる。九兵衛はもともとは「性猛く邪見にして、人にまけ嫌ひな男」であったが、「御法義に入りしより、自然と物こと優しく聞えしなり。」とその態度が変化していく。特に蓮如上人の、「信を獲ば、同行にあらく物をもいはじ、こころも和らぐべきなり」という言葉を守っていた結果の所意であると、解説される。しかし、同行に穏やかな心や軟言をもって接したら、前述した行動になるとは考えにくい。「御法義に入りし」という「法義」の中に「因果」の道理が説かれているのであろう。このことは先の文中にある「前世の業なりと気を付させて下さるは、ひとへに大善知識の厚御教化の顕れなり。」という九兵衛の言葉より理解できよう。

この世の出来事のみで考えると、到底容認出来ないようなことでも、「前世の業」という観点で理解すれば、説明することも可能になる。のみならず、一見不条理と思えるような事態にも諾々として従うということになる。それは「因果を知っ」たからに外ならない。

4

以上、「説法における因果」という漠然とした問題を提起し、『百座因縁』を中心として、「因果」がどのように語られているかを見てきたのであるが、およそ次のように纏めるこ

とが出来よう。

1、この世で起こる不合理と思われる出来事、（これは適当な説明が不可解である場合が多い）がある。

2、因果の法則によって説明をする。（一見不合理であるが、整然とした法則の中にあるということ）

3、更に、それを例話として、自宗への勧誘をはかる。

（この場合は浄土真宗）

これらのことは、いわば極めて当然と受け取られるまとめである。が、1に述べたような出来事は、因果という意識がはいりこまなければ、単なる不思議な出来事で終わってしまう話である。その点は以前『今昔物語集』について考察したことがある。（『今昔物語集』（巻二十六）にあらわれた宿報の意識　別府大学国語国文学22号）つまり、その出来事を「因果」によって説明することにより、はじめて因果を語る説話としての位置が付与されるのである。逆な見方をすれば、その話が不合理であればあるだけ、因果が歴然としてくることにもなるし、又重く感じられるのである。

不合理な話が因果と結びつけて語られることにより、整然としたものとして改めて理解されてくるのである。そして、説法の中で語られることにより、因果はさらに人々の中に深く浸透していった。

（本学教授）